

## 「温故維新一美・技のSAGAー」開催要項

- 1 展覧会名称 肥前さが幕末維新博覧会特別展「温故維新一美・技のSAGAー」
- 2 会 期 平成30年3月17日(土)～5月13日(日)  
会期中無休 開館時間：9時30分～18時
- 3 会 場 佐賀県立博物館(1・2・3号・大展示室)、佐賀県立美術館(3・4号)
- 4 趣 旨

幕末・明治維新时期を中心に現代までの佐賀の美術家の名品を「美」・「技」の2つのテーマで紹介します。

「美」をテーマにした展示では、近代洋画界をリードした百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助をはじめ、今、まさに国内外で活躍する多久市出身の池田学までを紹介し、佐賀が育んだ美術家150年の歴史をその代表作でたどります。また、「技」をテーマにした展示では、幕末期から明治期にかけて国内外で開催された各種博覧会への出品作をはじめ、現在、佐賀県の染色家として著名な鈴田滋人氏の木版摺更紗など人間国宝の代表作を紹介し、佐賀のものづくりの底力・奥深さを伝えます。

あわせて、「美」・「技」を育んだバックグラウンドとしての佐賀の歴史・風土について、貴重な実物資料や映像、グラフィックパネルを効果的に用いながらわかりやすく紹介します。

- 5 主 催 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館、佐賀新聞社、サガテレビ
- 6 観 覧 料 有料(高校生以下及び障害者手帳をお持ちの方とその介助者1名は無料)
- 7 展示点数 約180点
- 8 展示構成及び主な展示予定資料

### 第1章 佐賀の風土・歴史

#### 佐賀の美・技を育んだバックグラウンドとしての佐賀の歴史・風土

現状の常設展示資料(「佐賀の歴史と文化」)を中心に貴重な実物資料や映像、グラフィックパネル等を効果的に用いながら紹介する。

### 第2章 佐賀の技

#### 明治の超絶技巧から現代の超絶技巧へ

- ・色絵六歌仙白龍文大花瓶 1894(明治27)年 佐賀県立美術館蔵
- ・鈴田滋人 木版摺更紗着物「漿果文」 1999(平成11)年 佐賀県立美術館蔵

### 第3章 佐賀の美

#### 明治から現代へ～美の変遷を辿る～

明治から現代まで、日本ひいては世界で活躍する佐賀ゆかりの芸術家たちの作品(油彩、日本画、アクリル画、立体作品等)計60点程を展示。

- 9 問合せ先 佐賀県立博物館・美術館  
【担当】学芸課博物系担当係長(学芸員) 山崎和文、立畠敦子、岩永亜季  
TEL 0952-24-3947 FAX 0952-25-7006

## 第2章「佐賀の技」

「佐賀の技」を象徴する美術として、第一に陶磁器があげられ、そのうち鍋島焼は鍋島緞通とともに江戸時代に毎年佐賀藩から将軍家へ献上された最高級の工芸品です。また、鍋島更紗も佐賀藩の贈物として作られたもので、佐賀錦（鹿島錦）とともに佐賀の優れた技によって生まれた工芸品としていずれも今日に継承されています。

一方、人物に着目すると、慶応3年のパリ万博に江戸幕府と薩摩藩とともに参加した佐賀藩の団長、佐野常民は明治6年のウィーン万博では日本政府の総裁大隈重信とともに副総裁をつとめます。さらに、納富介次郎は技術伝習生として欧州の陶磁器製造を学び、翌年のフィラデルフィア万博では出品審査を担当しました。このような、佐賀人の万博への参加は、諸外国の技術水準の高さや文化の違いなどを知る絶好の機会となる一方、明治日本の産業発展の方向性を決める上で重要な役割を果たしました。輸出用にこれまでの技術に新たなデザインを取り入れた磁器やガラスが制作されました。こうした彼らの活躍の礎には、幕末期反射炉を用いた鉄製大砲の铸造や、精錬方での理科学研究のように佐賀藩の国際性、先見性に富んだ独自の政策があったことは言うまでもありません。

本章では、江戸時代から明治時代までに制作された鍋島焼、鍋島緞通、鍋島更紗、佐賀錦の名品と、これら伝統的な工芸品を継承し新たな創意を加えた人間国宝（重要無形文化財保持者）の作品を展示すると共に、万博への参加を機に欧米からの新しい技術を導入するなど改良に力を入れ、当時の「技」の粋を究めたメイドイン佐賀の作品を展示します。

時代の要請にこたえ色とりどりに花開いた「技」を通じて、SAGAのものづくりの底力・奥深さをお伝えします。

問い合わせ先

佐賀県立美術館 【担当】学芸課副主査・学芸員 立畠敦子

〒840-0041 佐賀市城内1丁目15-23

TEL.0952-24-3947 FAX.0952-25-7006

[tatehata-atsuko@pref.saga.lg.jp](mailto:tatehata-atsuko@pref.saga.lg.jp)

### 「第3章 佐賀の美」概要

江戸末期から明治にかけて、佐賀藩はいち早く欧米の技術に着目しました。絵画においては、文化7（1810）年には藩士を派遣し、司馬江漢から蝨画（油彩画）を学ばせたという記録が残っています。また、明治初期には、百武兼行が、最後の藩主・鍋島直大の随員として洋行したことを契機にヨーロッパで本格的な油彩技法を学び、日本人としては最も早い時期にすぐれた裸婦像を描きました。彼を嚆矢に、佐賀からは久米桂一郎、岡田三郎助といった優れた洋画家があらわれ、近代日本におけるアカデミズムの形成に重要な役割を果たしました。また、岡田門下ながら師の元に安住せず、アバンギャルドの画家として異彩を放った古沢岩美、今なおたゆまず前衛芸術家として国内外に存在感を示し続ける池田龍雄も、佐賀が輩出し、時代をリードした特筆すべき美術家といえるでしょう。

近年では、佐賀ゆかりのアーティスト達が、世界的な評価を受け、めざましい活躍を見せています。現代のテクノロジーを用いて自然現象を再構成・提示する吉岡徳仁、ペンを用いた緻密な描写によって壮大なイメージを描き出す池田学が注目されるところです。明治から現代まで、時代をうつし、美をあらわしたひとびとの、美の系譜をご覧ください。

#### 問い合わせ先

佐賀県立美術館 【担当】学芸課副主査・学芸員 岩永亜季

〒840-0041 佐賀市城内1丁目15-23

TEL.0952-24-3947 FAX.0952-25-7006

[iwanaga-aki@pref.saga.lg.jp](mailto:iwanaga-aki@pref.saga.lg.jp)